

## いのちの水流

博多の町に欠かせない大切な行事「博多どんたく」も「博多祇園山笠」も今年は開催されないことが決まりました。伝統を引き継ぐ担い手にとっては、断腸の思いの決断だったと思います。疫病退散を祈祷する目的で、鎌倉時代、承天寺の聖一国師が水をまきながら町を清めて回ったのが「山笠」の発祥とも言われているので、この時期、開催できないことは、二重の意味で無念だったろうと思います。

さて、桜の花はとうの昔に散ってしまいましたが、次第に緑の色を深める桜葉は生命を謳歌しています。「今年でなくても、来年も桜を見ることはできます」何度かテレビを通してこう呼びかけられ、多くの人がこれに従ったものの、人々に愛でられることのなかった今年の桜は、やはり可哀想でした。

さくら花幾春かけて老いゆかん身に水流の音ひびくなり（馬場あき子）

あと何年桜を賞でることができるだろうかなどと感慨にひたる間もなく、若葉は爽やかな息吹を吹き込んでいます。人類が新型コロナウイルスに苦しんでいようといまいと、変わらぬ大自然の営みがある一方、自然の一部に間借りしているに過ぎない人間は「さくら花」がめぐり来るとともに身体のうちを時を刻みつづけています。

歌人であり科学者でもある永田和宏さんがこの歌を評して、季節のめぐる円環時間には、行って帰らぬ直線的な時間の流れが交差しており、人間は直線と円とが織りなす螺旋時間を生きているのだと語っていました。来年の桜は螺旋の一つのピッチ分ずれた花の季であり、年が変わるごとに、ひとまわり新たな景色として現れるのでしょう。そして、そうやって時間の流れを感じる体の奥底に、いのちの水流の音がひびくのを感じるのです。

### ■ 坂口安吾『桜の花ざかり』

この螺旋のピッチを75回巻き戻して時間をさかのぼってみると、今年と似たような、荒涼とした桜の森に遭遇します。

昭和20年3月10日に始まる東京大空襲は、5月26日まで5回にわたって東京の街を焼き尽くしました。第1回目と第2回目・3回目（いずれも4月）の空襲のあいだは、ちょうど桜の花が咲き誇る時期と重なっています。

空襲で地獄絵と化した地上にも、やはり桜の花は咲いていました。

死者たちを上野の山に集めて焼いたとき、桜の花が満開だった様子を、坂口安吾は新聞連載のエッセイ『桜の花ざかり』に残しています。

三月十日の初の大空襲に十万ちかい人が死んで、その死者を一時上野の山に集めて焼いたりした。

まもなくその上野の山にやっぱり桜の花がさいて、しかしそこには緋のモーセンも茶店もなければ、人通りもありゃしない。ただもう桜の花ざかりを野っ原と同じように風がヒョウヒョウと吹いていただけである。そして花ビラが散っていた。(中略)

花見の人の一人もいない満開の桜の森というものは、情緒などはどこにもなく、およそ人間の気と絶縁した冷たさがみなぎっていて、ふと気がつくと、にわかには逃げだしたくなるような静寂がはりつめているのであった。 (『桜の花ざかり』坂口安吾)

空襲による死者のくだりを除けば、ほとんど今年の桜に重なって見えます。

安吾は、この景色にインスピレーションを受け、のちの幻想的な小説『桜の森の満開の下』に結実しましたが、わたしは『墮落論』につづく再生の息吹を、このエッセイの随所に感じます。安吾は先に引用した文章の前に、こう書いています。

別に悟るために苦心して悟ったわけではなく、現実がおのずから押し付けた不逞な悟りであった。どうしても逃げられない悟りである。そういう悟りの頭上に桜の花が咲いていれば変テコなものである。

安吾は、死地に辿り着いて悟りきったつもりでいる、その頭上に桜の花が咲いている様子を「変テコ」と形容しています。その「変テコ」なものの中に、いのちの力強さ、馬場あき子の歌にも響いている「いのちの水流」を見出したのではないのでしょうか。

安吾は戦時中、驚くほど楽観的な文章を書いています。それは戦局に対してではなく、人が困難にぶち当たっても、なお這い上がる力を信じていたことを示しています。今この難曲に当たって、わたしたちも見習うべき心構えなのではないか、不自由な生活を続ける中でどのように考えます。

## ■ 「祝いめでた」が復活する日まで

今年の夏には、櫛田入りする一番山の「祝いめでた」を聞くことができません。

「祝いめでた」は、もともと、お伊勢参りに出かけた博多の町人が、お伊勢さんで唄われたものを持ち帰ったものが、地元になくはならない祝い唄として定着したものです。その意味で、自由な往来を寿ぐ唄と言っていいのかもしれませんが。

山笠が延期されることで、螺旋のひとつの節目が飛んで行ってしまったような寂しさを覚えますが、やがて博多の町を活気づけるこの唄が、辻々によみがえる日を信じて待ちたいと思います。

(所長 瀬戸 英晴)